

閲覧 at らんだむ

地域金融の未来 金融機関・経営者・認定支援機関による価値 共創



森 俊彦 著
中央経済社
2020年11月発行
A5判
180ページ
2,090円(税込)

地銀再編が喧伝され、コロナ禍で多くの中小企業が未曾有の苦しみに喘ぐとき、その羅針盤ともいべき本が上梓された。地域経済をどう活性化していくか、そのカギとなる地域金融について、日本銀行出身でとりわけ中小企業支援に力を注いできた著者が、その現状と今後のあり方を提示する1冊だ。

中小企業の現状と対応すべきシナリオ、金融行政の変遷や、政府の中小企業支援について解説するとともに、中小企業・金融機関・認定支援機関の3者が取り組むべきことや、地域経済エコシステムの構築、アフターコロナについても触れられている。

第1章から第7章までは10のセクションから成り立っており(第8章のみ3セクション)、それぞれが見開き2ページで構成され、実にわかりやすい。文章も平易でかみ砕くように書かれているが、決して俗には落ちてはいない。それは第1章で、「銀行法第1条と金融機関の使命とは」と正面から大きく構えていることでもわかる。

全国の中小企業診断士、公認会計士、税理士、弁護士、弁理士はもとより、金融機関の役職員、そして中小企業の経営者まで、地域金融に携わる者は必読といってよい。日々を振り返り、明日の指針を探す座右の一巻として手元に置かれてはいいかがか。

■一言賛斬

著者は現在、金融庁参与、商工中金アドバイザー、中小機構中小企業応援士を務めている。「全国の中小企業の元気を引き出し後押しして明るい未来を創りたい」という思いの実現に向け、第2の人生のすべてを投入しているという。

政府機関のエキスパートと呼ばれる人が著作を物すとき、ややともすると陥りやすいことがある。一つは大所高所からの「ご高説」が過ぎて実用に供せないこと、二つには豊富な知識と経験ゆえに「広く世に問いたい」といいながらも、一部専門家の興味しか引かないことなどである。

しかし、本書はさにあらず、180ページの全編を貫いているのは著者の並々ならぬ中小企業への熱情であり、それがあつては鮮やかに、あるいは微かに香り立つ。華麗なる経歴にもかかわらず、中小企業に対して徹底した現場主義を貫く氏の人柄がしのばれる。本書で取り上げられている具体的な事例の数々も、著者が直接かかわってきたものである。

また、「はじめに」は飛ばさず、本文同様に精読されることをお勧めしたい。「お金は血液、日本銀行は心臓、血管は金融機関、血管の先には中小企業」の言葉は、およそ経済・金融に携わるものがあまねく噛みしめるべきものではないか。

著休め的に書かれているコラム7編も、なかなか味わい深いものがある。経営者・仕事仲間との会話に彩を添える「ちょっといい話」となっているので、ご活用いただきたい。